HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開会の挨拶
Author(s)	蔵田, 伸雄
Citation	応用倫理, 10(Suppl), 4-5
Issue Date	2018-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72177
Type	other
File Information	salutatory.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学大学院文学研究科 応用倫理研究教育センター主催　公開シンポジウム

教養とジェンダー

日時：2017 年 12 月 9 日（土）13:30 ～ 16:30
場所：北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟２階 W203 室

開会の挨拶

蔵田：これより、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター主催の公開シンポジウム、「教養とジェンダー」を開催いたします。

まずは主催者を代表いたしまして、北海道大学大学院文学研究科応用倫理研究教育センター長を務めております、私、蔵田伸雄よりご挨拶を申し上げ、本日のシンポジウムの趣旨について簡単にご説明させていただきます。

本学の応用倫理研究教育センターは、10 年余りの活動を通して、わが国の応用倫理研究の発展に寄与し、また国際的な研究ネットワークの形成にも貢献してまいりました。また、本学におけるジェンダー・セクシュアリティ教育において中心的な役割を果たすということも、本センターの重要なミッションの一つとなっております。そして、本センターはジェンダー、セクシュアリティに関してさまざまな問題を学外の皆様とともに考える機会として、毎年フォーラムやシンポジウムを開催してまいりましたが、それも今年で 11 年目になります。これまで取り上げてきたテーマには、「性差医療」「ドメスティックバイオレンス」「性感染症」「老いとテクノロジー」「異性装」、あるいは「結婚」、そして一昨年の「同性パートナーシップ制度導入を考える」、さらに昨年度の「シティズンシップと市民運動 ── LGBT をとりまく日本的事情 ──」などがあります。今回は「教養」あるいは「教養主義」をキーワードにして、男性、女性、あるいはそれ以外のセクシュアリティについて、皆さんとともに考えていきたいと思います。

さて、教養というものはよきものであり、真のエリートである男性は教養を持つと考えられてきました。世俗的な価値から自由である、文学、哲学、芸術の価値は純粋なものであり、それを求めることは肯定され、特に明治期以降の日本では教養は西洋文化の受容として考えられてきました。しかし、そのような教養あるいは教養主義は、女性あるいは男性のジェンダー理解を固定化する機能をもっていたのではないでしょうか。近代の日本において教養は、男性・女性のジェンダー規範において大きな、しかし歪んだ影響を与えてきたのではないでしょうか。北海道大学の前身である札幌農学校も含めた、旧制高校的な教養主義の強い環境の中には、ある種の男性性あるいは抑圧性や、女性排除の構造はなかったでしょうか。そこでは差別的な構造を隠蔽するような“いやらしさ”が隠されていないでしょうか。さらに、旧制高校的な男性的教養と対になる「女学校文化」における教養も、女性のジェンダー的な自己理解の形成において、それを補完する

機能を果たしてきたのではないでしょうか。こういった問題について考えることは、教養と高等教育制度、西洋文化の受容、作品を文化として鑑賞するという姿勢そのものを、ジェンダーの観点から問い直すことを意味しています。本日は、皆様とともにそのような問題について考えたいと思います。

蔵田伸雄さん

まず、シンポジウムの進行についてご説明いたします。

前半では3名の登壇者に、教養とジェンダーについてそれぞれ30分程度でお話ししていただきます。

パネルの一人目は、筑波大学大学院人文社会科学研究科の平石典子先生です。平石先生には『煩悶青年と女学生の文学誌 ── 「西洋」を読み替えて』というタイトルの著作もございますが、本日は、「『外国語（文学)』を読む女たち ── 可憐な生徒から宿命の女へ」というタイトルでお話ししていただきます。

お二人目は、桃山学院大学経営学部の高田里恵子先生です。高田先生は、『女子・結婚・男選び ── あるいは〈選ばれ男子〉』『グロテスクな教養』『文学部をめぐる病い ── 教養主義・ナチス・旧制高校』といった、関連する多くの著作を執筆していらっしゃいます。高田先生には、「学校の勉強なんかしない ── 男の特権？」というタイトルで、学校の勉強にはない、文学や哲学に価値を見出すという教養主義の特徴についてお話ししていただきます。

三人目は、慶應義塾大学文学部の小平麻衣子先生です。小平先生は、女学生文化の中での女性にとって教養とはどのようなものだったのかを論じた、『夢みる教養 ── 文系女性のための知的生き方史』という本をお書きになっています。小平先生には、「〈○○鑑賞〉は趣味なのか？ ── 教養の拡張と文学の関係」というタイトルで教育と大学、および研究、そして性との関連についてお話ししていただくことになります。

その後、コメンテーターとして、近代日本思想史をご専門とする、本学文学研究科映像・表現文化論講座の水溜真由美先生から15分程度お話ししていただいた後、休憩を取ります。その間に、ご質問やご意見のある方は「ご意見・ご質問用紙」にご記入いただき、受付もしくは会場内のスタッフにお渡しください。シンポジウムの後半は、皆さんのご意見を交えた討論を行いたいと思います。前半の後休憩を取り、その後にコメンテーターを交えた登壇者の皆様の討論、そしてフロアの皆さんのご意見を交えた討論を行います。長い時間になりますが皆様には今回のシンポジウムをお楽しみいただきたいと思います。

それでは、お一人目の登壇者は、筑波大学の平石典子先生です。